

## 「義弟に学んだ人生の終わり方」

2021-8-5

野口幹夫

彼は8つ年下だったが、昨年見事に人生の幕を閉じた。今年新盆を迎える一人だ。

彼から思いがけず、人生のしまい方を見事に教えられた。

彼は平塚で一人暮らしだったので、誕生日だといったら、夫婦して彼を招き、寿司屋に行ったりしていた。そのうち食が細くなったと見ていたら、貧血で倒れ入院。胃がんだった。手術後、自立生活はむづかしいとみて、二宮の老人ホームに入った。食の心配はなくなったし、健康診断もしてくれる施設だった。3年ほど、職員とも仲良くなって楽しくやっていた安心していた。ある時その施設から妻に電話があった。1階の食堂まで降りてこない日が多くなったという。ここではこれ以上の世話は無理だという。終わりまで面倒を見てくれるのだと思い込んでいたので慌てた。

妻はインターネットでよく調べ回った。そして伊勢原にある「サービス付き高齢者住宅」に空きがあることを見つけた。重要なことは、看取りまでやるというケアの条件だった。幸いすぐ受け入れてくれることになり、最後の引っ越しをした。コロナがぼちぼち話題になり始めた頃である。伊勢原市への転居手続きなどは彼も元気に一緒にやりとげたのである。

そして新しいケアハウスの個室に入室すると、待っていたかのように食を絶ってしまったのだ。入居して2週間、その前夜、我々は様子を案じて一緒にいたが、深夜になりそうなので帰宅した。その2時間後、施設の職員と契約の医師に見守られつつ、彼は静かに旅立った。癌は肺にも転移していたが、幸い呼吸が困難になることなく、老衰の自然死であった。

食べられなくなると、点滴に始まり胃瘻という手段で栄養補給するが延命治療がある。彼は医師に延命措置はいらないと伝えていた。そして食を絶ったので、自然死を迎えた。

老衰・自然死それが一番安らかな死を迎えることになるそうだ。それは後で知ったことだ。それを見事に実地で教えてくれたのだ。

さらにあとがある。

まず彼の希望で海洋散骨をした。逗子沖で見送り爽やかであった。

また分骨して両親の眠る墓に葬るため彼の墓碑銘を書くところで、墓石にあるクラックのためここには記入できない。新しい墓石をつくった。これに「宇宙に還る」と書いた。世の中になく唯一の墓石をプレゼントしてくれた。希望の墓である。我々もやがて宇宙へ還る。

